

# 生後1年間の謎

2009

川崎医科大学名誉教授/kids21 子育て研究所所長  
片岡 直樹

ヒトの赤ん坊は、生後1年間に及ぶ無力な状態で生きていく。他のほとんどの動物（哺乳類）は、生れてその日のうちに立ち上がり、歩き始める。人間だけ1年間も横になったままである。ポルトマンは「ヒトは1年間の生理的早産」といつている。生れて間もない人間の赤ちゃんは、脳の成熟状態においても、感覚器官や運動器官の完成度においても、このような試運転をおこなえる状態ではない。にもかかわらず、現実から十分なフィードバックを経ることなく、将来の膨大な情報処理に備えて、大脳の各部分は増大し続ける。このため、外界との接触による点検を受けない非実践的な脳が生まれてくる可能性がひそんでいるかもしれない。

定型発達していく赤ちゃんの場合、わずかな手足の動きや泣き声などによって周囲の人間に働きかけ、外部の世界と自分の位置を確かめ始める。それは彼らの脳がこの時期から人間への働きかけを除々に始めるよう仕組まれているからに違いない。彼らの社会的な行動の出発点である。ヒトや高等哺乳類の社会的行動は大脳辺縁系に強く関係している。

自閉症児は欲望や感情の発生源に機能的障害をもっているという（一般的）自閉症は、通常専門家たちによると、先天性の脳機能障害であるといわれる。泣いたり、笑ったり、親の気を引いたり、目を合わせたり、呼んだらふり向いたり、まねをしたりなどの如く、心が通い合うことが一切ない。身振りが無い、指差ししない、ごっこ遊びをしない、周囲に無関心、泣いて訴えることがないなどのために手がかからないおとなしい赤ちゃんだったと振り返る親が多い。

さらに不思議なことに、その途中からそれらを失ってしまう折れ線タイプの言葉遅れ（小児崩壊性障害）の子どもたちが自閉症の2～3割を占めるとともに専門書に記載してある。この愛着障害も生まれながらの障害に入っている。

ある精神科医の本によると、“重度の発達障害と軽度の発達障害に分けられる”という。重度の場合、ダメージモデルである神経経路の一部分に大きなダメージが存在。生後はやくりハビリが大切。しかも両親が子どもと向き合う時間が大切で専門家まかせではダメ。軽度発達障害の場合、問題は発達の凸凹である。発達のいかんにかかわらず、なるべく早く治療をスタートさせたい。